

同志社大学

2009年度 個人研究費研究経過・成果報告書

2010年 3月 11日提出

所 属	職 名	氏 名
文学部 哲学科	教 授	宮 庄 哲 夫
研 究 題 目	宗教改革の精神史的研究	
研 究 成 果 の 概 要	<p>宗教改革期は東ローマ帝国を倒したイスラーム勢力との対決の時代であり、ルターのイスラーム理解を検討することと、それをとおして宗教改革運動をも含めた異なる宗教及び信仰との間の対立・共存、寛容・不寛容の近代的思考形成の背景を明らかにすることが求められる。</p> <p>そもそもルターのイスラーム理解の根底にあるトルコ人への言及は、宗教改革の烽火となった1517年の、いわゆる『九十五ヶ条の埶題』の解説として、翌1518年に著された『贖宥の効力についての討論の解説』に始まる。その第五項でルターは「トルコ人と戦うことは、トルコ人によってわれわれの罪を罰したもう神に逆らうことにほかならない」と解釈する。宗教改革の開始時から一貫してルターはトルコ人を「神の怒りの答」と解する。旧約のイザヤ書(10章)に基づくこの神の怒りの答のメタファーは、キリスト教世界の悪を懲らしめんとする神の怒りの答である故、イスラームとの対決はこの答をもって我々に臨む神に逆らうことになる。</p> <p>しかしイスラームの戦争行為は「悪徳そのものであり強奪に他ならない」からトルコ人に対する戦いは「神からの命令と正義の行い」であるという確信を持つことが勧められるが、それは決して聖戦論でも正戦論でもない。即ちこのメタファーが、ルターの宗教改革的神学の深まりにおいて新たな展開を見せる。それがこの世の統治権とその職務論をめぐる神学的基礎づけである。いわゆる <i>Zwei-Reiche-Lehre</i> (二世界統治論) の世俗的権力論から神の答であるトルコとの戦いが改めて論じられることになる。職務論として「救いにあずかる身分や神聖な職務 (<i>ynn seligem stande und Göttlichem Ampt</i>)」の考えによって、ルターの議論が転換する。</p> <p>すなわち、切迫したトルコ人の脅威は、実はわれわれの悪に対する神の怒りの答であった。だからトルコ人に対する戦いは、われわれ自身の悪に対する神の怒りに応答するものでなければならない。神の怒りに応答する行為は、われわれの悪を懺悔する他はない。したがって、トルコ人に対する戦いは、「懺悔で始められねばならず、私たちの本性が改められなければならない (<i>an der busse angefangen seyn und müssen unser wesen bessern</i>)」のであると。真のキリスト者としての懺悔・悔い改め・改心という内的戦いと、この世的統治者の外的な職務としての防ぎ護る行為が、ルターの世俗的権力・統治についての神学的射程において主張されてくる。そこに登場するイスラームと戦う二人が「一人はクリスティアヌスであり、他の一人は皇帝カール」即ち、真のキリスト者と職務としての皇帝の務めの議論である。</p> <p>この研究成果を、論文「ルターとイスラーム」(文化學年報、第58輯、2009年)として発表した。</p>	